

## 令和3年度第2回自然再生専門家会議 議事概要

日時：令和4年1月28日（金） 14:00～16:00

場所：オンライン会議（配信拠点：TKP新橋カンファレンスセンター ルーム12B）

出席者（敬称略）：

（委員長） 鷺谷 いづみ

（委員） 大河内 勇                      小林 達明                      志村 智子                      高山 光弘

                    中村 太士                      宮内 泰介                      山本 智子                      和田 恵次

（関係省庁） 環境省、農林水産省、国土交通省、文部科学省から関係者

（協議会） 森吉山麓高原自然再生協議会の実施者

会議は公開にて行われた。（一般傍聴者22名）

### 【議題1：自然再生事業実施計画について】

資料1-1～1-3及び参考資料1-1～1-2を用いて、自然再生協議会から自然再生事業実施計画について説明があり、次に事務局から自然再生事業実施計画が自然再生推進法に則っているか、自然再生基本方針等に沿ったものかを確認した結果、事務局としては自然再生推進法に基づく助言は要しないとの考えが説明された。引き続き、委員からの質疑が行われ、その結果、主務大臣からの助言が必要だとの意見はなかったため、主務大臣からの助言は不要という結論となった。委員と実施者による主な質疑応答は次のとおり。

森吉山麓高原自然再生事業実施計画書第4期について

- クマゲラが棲める森を最終目標としているが、クマゲラ等の指標種に関するモニタリングを行っているか。特に、生態系の指標種になる大型動物は、ブナ林再生においても指標になると思われる。今後、可能であれば、実施計画書等に情報を取り入れてはどうか。  
⇒ クマゲラの生息範囲が広いため、協議会としてはモニタリングを実施していないが、地元保護団体や個人によりこの地域のクマゲラに関する調査が行われている。事業地近隣におけるクマゲラに関する情報収集は行っている。ツキノワグマについては、事業地において毎年確認されている。最近ではハクビシンが確認されており、影響を懸念している。
- 今後、植栽木の活着率の向上をカギとしているが、植栽本数等を踏まえた現状の活着率を説明頂きたい。枯死木数の説明はあったが、植栽本数がないため、定量的なことが少し分かりにくいように感じる。年による植栽本数の変化等も踏まえ実施計画書に記載してはどうか。  
⇒ 資料では枯死率のみ記載しているが、枯死していない植栽木は活着している（活着率）と考えている。通常は、30m四方の方形に169本植栽している。場所により活着率に差があり、悪い場所では30～40%、良い場所では90%以上の活着を確認している。具体的な活着率に関する数値等の記載を今後検討する。
- 植栽木の活着不良の原因にはどのようなものがあるか。事業地が広いため、様々な条件があると思う。その条件を把握し、どこにどのような樹種が適当なのか、どのように島を作るのが適当なのか等、計画されると良い。また、苗木の作り方で活着率が変わるため、適切な苗木をつくれるよう具体的な改善を目指すが良い。  
⇒ 地下水位が高い場所は、活着率が非常に低い印象がある。そのため、平坦地で地下水位が高い場所については、水分に強い樹木を多く植栽したり、客土を高く盛ったり工夫している。また、倒木で枠をつくり客土をいれ、群状に植栽する手法を実験的に行っている。

- 植栽せず自然遷移による自然林への回復を計画している場所はあるか。また、植栽を行わず、草地として残す議論はあったか。
  - ⇒ 種子散布が期待できる林縁部やブナの植栽に向かない地下水位が高い場所で既に自然木が生育しているような自然遷移が見込める場所は、植栽地から除外している。植栽は、主に、切土として草地造成された土壌条件が悪い場所や林縁部から離れた場所にて実施している。チシマザサの侵入前に樹林を形成するため、樹林間の距離があるところを中心に植栽地を設定している。また、一部、ススキ原として残すため、植栽地から除外している。
  
- 牧草地において、外来牧草が残っているなどの影響はないか。
  - ⇒ 牧草地では外来牧草を使用していた。現在でも樹林化が進んでいないところは外来牧草が残っている。今後、樹林化が進むとともに、牧草地からススキ草地にかわり、その後低木林化し、樹林化するといった自然遷移の進行を期待している。
  
- 多様な主体の参画を得るため、クマゲラ以外の動植物も象徴種として取り上げてはどうか。また、ブナ林は水源涵養機能等を有するため、近隣農地におけるブランド米化等を促し、多くの人の参画を得てはどうか。
  - ⇒ 多様な主体の参画は重要なこととして考えており、現在は教育委員会や学校関係者、企業等へ働きかけている。田園地帯からも離れているため、参加者が増えない状況であるが、継続して努力していく。ブランド米化については、事業地が農業地帯ではなく山村地帯のため、非常に難しいと感じている。
  
- 草地から森林に変わることで、水源涵養や治水などに良い変化があると想定される。森林だけでなく、水に関してもモニタリングを検討してはどうか。自然再生により、地域の生態系サービスや自然の恵みを豊かにすることが見える化できると、さらに参画が期待できると思う。
  - ⇒ 周辺の国有林が水源涵養保安林に指定されているため、改めて事業地にて水源涵養機能を強調しなくとも地域住民は十分理解していると考えている。水源涵養機能を果たしていることを十分に認識しながらこの事業を継続していきたい。
  
- 植栽が進み二次林が形成されつつあるため、シードリングバンクを作ることを検討されてはどうか。また、地球温暖化による白神山地におけるブナ林の消滅予測が出ており、今後、協議会として白神山地世界遺産地域科学委員会と繋がりを持ち、地球温暖化に関する情報についても収集してはどうか。
- ブナ林再生は難しいが、土壌ブロック移植の効果が出ているため、土壌条件を検討していくと良い。既存のデータをもう一度評価することにも意義がある。また、地球温暖化等の悪条件が重なる中で、より広くなるべく老齢なブナ林を広げ残すことに意義があるように感じた。クマゲラの将来的な生息に必要な条件を整理し、その中でこの事業地における森づくりの意義を具体的に明文化されると良い。
- 長い年月をかけた計画だからこそ、多くの参画や協力、理解が必要となる。植栽が終わった後の次の一手として考えがあれば、説明頂きたい。
  - ⇒ 白神山地世界遺産地域科学委員会に係る蒔田先生が本協議会の指導的立場であるため、協議しながら今後の事業を進めたい。また、事業地を再生したとしても、クマゲラの生息が安定するとは思っていないため、事業地を含む森林ネットワークを緑の回廊として設定した。この緑の回廊の設定と連動し、本事業が始まったため、それらも十分に理解しながら今後も進めたい。

- 気象や地下水等の環境データも併せて測定しておくが良い。
- ⇒ 一昨年からブナとサワグルミの混交林の自然林地帯にモニタリングサイトを設け、気象データの収集を始めたところである。今後はこれらのデータについても活用を検討している。

**【議題2：その他について】**

参考資料5～6を用いて、自然再生協議会全国会議及びOECDの概要・検討状況について事務局から報告があった。参考資料6についての委員からの主な意見は次のとおり。

- OECDの認定に関する仕組みは、国際的な流れか。もしくは、日本に取り入れる場合に、認定という仕組みで行うこととしたのか。
- ⇒ 日本における仕組みである。日本の場合は、民間が取り組む地域も重要になると考え、申請を受けて認定するという仕組みを、OECDの1つの形として考えている。

以上